

辰巳家所蔵脇型附について (一)

はじめに

この度、宝生流シテ方辰巳満次郎師御所蔵の、『脇直伝仕方附』(注)というワキ方の型附伝書の撮影と調査を御許可頂いた。本には署名も奥付もなく、紙質から近代の書写であると思われる。

本の内容であるが、『玉井』『白楽天』『富士山』『和布刈』『葵上』『土蜘蛛』『咸陽宮』『春栄』『紅葉狩』『蟻通』『羅生門』『正尊』『道成寺』『檀風』『谷行』『張良』など、ワキ方が活躍する能におけるワキの重習事の所作が小書ごとに詳細に書かれている。また『礼脇』『雑』『楽器ノ事』のように上演時の注意事項などが述べられている項もある。『雑』の項には「右ノ写セウガハ一噌又六郎政香ヨリ申請に談済。」とあり、笛方一噌流八世又六郎政香の名が出てくるので、その内容は江戸中期に遡るものも少なからず含む可能性があると考えられる。

この本については京都府立芸術大学の高橋葉子先生より、「早稲田大学演劇博物館所蔵の尾上家伝書『奥』(所蔵番号ニナ四〇 以下「尾上家本」と、曲目・曲順は違うのでまったく同一の底本によると

飯塚 恵理人*

は言えないと思うが、その内容から強い関係が認められると思う。」との示唆を頂いていたので、同本と詞章を比較したところ、御指摘の通り両者には共通記事が多く、尾上家と共通する伝承が『脇直伝仕方附』の筆者に相伝されていたことは疑いない。参考のため「尾上家本」内の目録を挙げると下記のようになる。(1)《張良―同替ノ形》(2)《松風―脇留ノ事》(3)《乱―酌膝行ノ事》(4)《定家―石塔離子ノ事・五輪碎ノ事》(5)《千寿―置鼓ノ事》(6)《楽器ノ事》(7)《清経―恋ノ音取ノ事》(8)《江口―合掌留ノ事》(9)《熊野―膝行ノ事・漆膠ノ事》(10)《野々宮―シテ合掌留ノ事》(11)《忠度―手向草ノ事》(12)《海人―中入ノ事》(13)《半部―立華ノ事・中入後作物中へ出ル事》(14)《葵上―袖の印ノ事・龍眼ノ頭ノ事》(15)《夕顔―山の端の出・作物ノ事》(16)《柏崎―笠ノ置所替ル事》(17)《安宅―独吟勧進帳ノ事・延年ノ舞有時ノ事》(18)《蟻通―サシノ謡有之事・并脇能ニ有時ノ事》(19)《吉野静―替装束ニ而勤ル時ノ事》(20)《源氏供養―語在之時ノ事》(21)《羽衣―松ニ衣ヲ掛返ス事》(22)《高砂―松ノ作物出ス事》(23)《融―金剛返シノ事・并脇留ノ事》(24)《道明寺―脇能ニ有時ノ事》(25)《弱法師―舞有時ノ事》(26)《三輪―脇留ノ事・当時なし》である。

後述の『脇直伝仕方附』目録と比較すると、『脇直伝仕方附』は「尾上家本」の伝承をほとんど含んでいることが分かる。『脇直伝仕方附』の《道成寺》（後述（45）《道成寺 脇能ノ事》）はその曲順から尾上家本の（24）《道明寺―脇能ニ有時ノ事》に対応すると考えられる。脇能には《道明寺》の方がふさわしい。「尾上家本」とこの本の両書を比較・統合することによって江戸中期の下掛宝生流の習事の実際がかなり明らかにできると期待できる。

なお芸能史研究会例会報告時に、『富士山』について「金春流の《富士山》に対応したワキの型ではないか」という意見を頂いた。また《白楽天》だけは本文において「上掛《白楽天》と断っているので、本全体は基本的に下掛に対応したワキ型付ではないか」という指摘を頂いた。また《江口 合掌留ノ事》《松風 脇留ノ事》《熊野 膝行ノ事》《同 漆膠ノ事》《乱 酌膝行ノ事》《野宮（仕手）合掌留ノ事》などの小書は現在にも伝承され上演されているが、『葵上 袖ノ印ノ事》《同 龍眼ノ頭ノ事》《羽衣 松二衣ヲ掛ケ返ス事》については、ワキ方にこのような小書が現在でも伝承されているのか確認すべきという御指摘を頂いた。この点については現在調査中である。

（凡例）

底本に忠実に翻刻することを心がけたが、読解の便宜を考え、以下の点について改めた。

- 1、旧字体は原則として新字体に改めた。
- 2、私に句読点を施した。
- 3、能の曲名は《》で囲んだ。
- 4、底本の書き入れは（ ）で囲み、その書き入れの該当部分に示した。

- 5、底本の墨消チとなっている部分は【】で囲んだ。
- 6、目録曲名の《》の後の漢数字は本の丁数

（本文）

他

（目次）

直伝仕方附

目録

- （1）《玉井》一（2）《白楽天》五（3）《富士山》六（4）《礼脇》八（5）《和布刈》十（6）《葵上》十五（7）《土蜘蛛》十九（8）《咸陽宮》二十七（9）《春栄》三十四（10）《紅葉狩》四十二（11）《蟻通》四十九（12）《羅生門》五十四（13）《正尊》六十四（14）《道成寺》六十八（15）《檀風》七十四（16）《谷行》八十九（17）《張良》百（18）《江口 合掌留ノ事》百十（19）《松風 脇留ノ事》百十（20）《熊野 膝行ノ事》百十一（21）《同 漆膠ノ事》百十二（22）《乱 酌膝行ノ事》百十二（23）《野宮（仕手）合掌留ノ事》百十二（24）《定家 石塔囃子ノ事》百十二（25）《同 五輪碎ノ事》百十三（26）《忠度 手向草ノ事》百十三（27）《千手 金鼓ノ事》百十三（28）《海人 中入ノ事》百十四（29）《楽器ノ事》百十四（30）《半部 建花ノ事》百十五（31）《同 作物中入ニ真中へ出ル事》百十五（32）《清経 恋ノ音取ノ事》百十五（33）《葵上 袖ノ印ノ事》百十六（34）《同 龍眼ノ頭ノ事》百十六（35）《夕顔 作物ノ事》百十六（36）《羽衣 松二衣ヲ掛ケ返ス事》百十七（37）《柏崎 笠ノ事》百十七（38）《高砂 作物出ル事》百十七（39）《安宅 独吟勧進帳ノ事》百十八（40）《同 延年ノ舞ノ事》百十八（41）《融金剛返シノ事》百十八（42）《同 脇留ノ事》百十九（43）《蟻通

サシ有事》百十九(44)《同 脇能ニ有時》百二十(45)《道成寺
脇能ノ事》百二十(46)《吉野靜 替装束ノ事》百二十(47)《雜
(雜の目次は本文の前に付けられているが、習事を一覽できるよう
に便宜上ここに載せる)〇日数能ノ儀式能ニ二日目ヲ五大臣ニスル
事 〇《楊貴妃》唐冠・法被・唐团扇ニテ勤ル事 〇《海士》一番
ニカキリ素袍上下ノ着付テ紅入厚板ヲ用テヨシ。 〇《船弁慶》《芭
蕉》語 〇《大蛇》黄狩衣 〇脇方ニテ狩衣ノ胸ヲ卷事 〇《野守》
ナラク留《蟻通》神楽留 〇《芭蕉》セリフノ内 〇一調謡ノ傳
〇《鉢木》一声 〇平調ノ足踏ノ事 〇《大江山》返シ 〇《藤渡》
返シ 〇《張良》中入後 〇《礼脇》ノ礼済テ 〇少刀ヲサス傳
〇《三輪》脇留 〇《道成寺》不動頭 〇上リソウ下リソウ 〇《檜
垣》中入後 〇《開口》一噌又六郎流儀唱歌

本伝書は大部のため、今回は(1)《玉井》一から(13)《正尊》
六十四までの翻刻を載せる。

(本文)

(1)《玉井》連式人

始舞台ノ階子ヲ分テ左右ヘ作物出ル。右ノ方ヘ井筒。左ノ方ヘ桂ノ
作物出ル。一 音取フキカ、ル。十五間拾三間亦拾壹間迄高音吹出
スト幕ヲ上ル。夫ヨリ短キハ中ノ高音ユリ・ロクノ下ナドヨリ出ル。
長短ニヨリ心有ヘシ。脇能次第之通幕ハナレシテキヒスを上狩衣サ
ハキサソウ袖済テ舞台ニ入り真ノ名ノリ。尤三足ノ引足ニ吹カケノ
頭ヲ合セテ笛吹留テ「夫」ト謡出ス。一鉢置鼓ニ合セテクハリテ出
ル心有ヘシ。「扱も兄」ト目付柱ノ方ヘ角掛「彼釣針を」ト正面ヘ
直シ「尋んと思ひ立て候」ト達拝シテ一足引「わたすミの」ト謡。
「翁のおしへに」ト右ノ足ヲヒネリ脇座ノ方ヘ向。左ノ五足出テ常

之通道行ノトヨリニ連ト立向。「直なる道を」ト謡。道行脇能ノ通
本着(す。尤キヒスヲ上ケテヲロス。後々メダ、ヌ方ヨシ)。少シ
閑ナル方〇連ハ常ノ名乗事ノ通橋掛ニクツロキサシニ成立テ出立
向。道行スミワキノ立廻リナシ。(真正面請ル。)時ニ後ロヲ通座ニ
行下ニ居ル。△脇ハ立廻ナシ。正面請。(一足出)「扱も我」ト謡。
「都に入ぬ」ト右ノ足ヲ少シヒラキ面ヲ脇正面ノ方ウケ「是にるりの」
ト目付柱ノ左ノ方上ヲ見「光門は」ト謡ナカラ面ニ付テ鉢ヲ直シ左
方其俣出井筒ノ側迄行左ニテ一寸留リ直ニ左ノ足ヨリ一足出井筒ヘ
真向ニナリテ「玉の井あり」ト見ル。「又湯津の」ト面ヲ上鉢トモ
ニ桂木ヲ見「事のよしをも」ト正面ヘ直シ右ヨリ一二足引謡済テ脇
座ニ行下ニ居ル。シテ小謡「枝をつらねて諸ともに」ト打切ニ仕テ
ヘ向。「深き契りハ」ト返シニ角掛立テ左ヨリ一足出、「我玉の井の」
ト謡。「たゝすむ」トツレヨリシテヘ見廻シ向事。「是なる木蔭に」
ト左ヨリ一足出正面ウケル。「忍ふ姿」ト謡ナカラ右ヲヒネリ脇座
ヘ向。一足カヘリ右ヘ廻リシテヘ向一足出ル。「荒は誰々」ト連ヘ向。
「いやされハこそ」トシテヘ向。「我ハせうとの」ト又連ヘ向。「互
に連枝の」トシテヘ向。「ゆふしての」ト打切ニ脇正面直シ立テ居ル。
「ひくにあまたの」ト返シニシテヘ向。「宮中ヘ参り候へし」ト謡。
打掛ニ右ヨリ左出シ廻リ脇座ニ下ニ居直ス。(但シ常之立廻リ下ニ
居モノトハ違「宮中に参申候へし」ト云文句取持有心有ヘシ)「然
れハ」トサシニ向。上ノ跡「塩満塩ひる」ト直ス。「三とせを送り
給へり。」ト向。「角て三年に」ト謡。「拝せおわしませ」ト謡済テ
直ス。中入狂言シヤヘリワキ説賦ナシ。作物入ル。「天女式人出テ」お
のく玉を捧つ、ト向。大ヘシニ直ス。シテ出テ「まうとの君の」
トシテニ向。「天孫の御前に」トシテ釣針ヲワキノ前ニ置ヌ。橋掛
ニ行。天女「釣針に取そへさ、け」ト珠ヲワキノ前ニナラヘル。此

方ヨリカマハズ。三色共ニシテノ後見ヨリトル。舞ニ直ス。「何れも妙なる」ト天女ニ向。「わたすみの宮主」ト舞働ニ直ス。天女脇ツレノ下モヘケル。カマハズ。働スミ「わたすみの宮主」トシテニ向。「拍子を揃て」ト角掛立。「尊ハ御座を」ト左ヨリ二三足出ル。「袂にすかり」トシテワキノ右ノ袖ニ手ヲカケル時面ハカリシテノ手ヲ見。シテニ向「わたすみの乗物」ト鉢共ニシテノ方ヘ向。右ノ足ヨリ三足程出。「五丈の」ト面ハカリニテ階子ノ所上ヘヲ見。スクニ下タヲ見。但シ板ヲ見ルヤウニ。「わに、」ト左ノ足ヲ正面ノ方ヘツカイ右ノ手ヲ上ヘヨリ正面ノ方ヘ出シ右ノ足モヨセテ「のせ」ト右ニテ拍子一ツフミ直ニ右ノ足ヨリシテノ表ヲ通り橋掛一ノ松ノ辺マテ足ヲサラ／＼トハコヒ心ヲ閑ニ行事。都而此辺ニ口伝多シ。心有ヘシ。一ノ松ノ辺ニテ足ヲシツメテ幕ヘ入ル。○連ハ常之通ニシテノ跡ヨリ入ル。

(2) 上掛《白楽天》(連式人)

音取・置鼓。幕ハナシ。真ノ名ノリ。《玉井》ノ通。「抑是ハ」ト謡名ノリ。下掛ノ通り。「唯今海路に」ト達拝して打掛テ《玉井》ノ通ニ立廻リ連ト立向仕方モ同断。ツ、ケ打切「船漕出て」ト此所ニテ次第謡。二扁ナリ。地次第モ合セテ謡ハセル事。「国を尋んや。東海の」ト直ニ謡。《車僧》ノ通。道行仕様モ下掛ノ通。問答・初同常ノ通。初同留ニシテ脇正面ニイル。向。「猶々尋ぬへき事あり。舟を近付候へ。」ト謡。又直ス。シテクツロキ棹ヲステ、又端ノ名ノリ座ノ前ヘ出ル時向。「いかに漁翁」ト謡。跡ハ下掛ノ通。装束下掛ノ通り。

(3) 《富士山》(連式人)

音取・置鼓幕ハナレ真ノ名ノリ《玉井》ノ通「抑是ハ」ト謡。「扱も」ト角掛「其ゆいせき」ト正面ヘ直シ「日本に赴候」ト達拝済テ、打

掛ニ常之通立廻リ連ト立向。○連《玉井》ノ通り。△脇道行脇能ノ通本着。立廻リ詞スミ脇座ニ行下ニ居ル。○連モ同断△ワキ・シテ小謡。「夏野の深みとり」ト打切ニ向。「妙なる山のミかけ哉」ト返ニ角掛立。右ヨリ出テシテニ向。初同「三保の松原田子の浦」ト打切ニ立廻リ下ニ居直ス。「実も妙なる山ミ哉」トシテニ向。「猶々富士山の謂」ト謡。「抑此富士山」トクリニ直ス。「頂上ハ八葉にして」トサシニ向。上ノ跡「教にしたかつて」ト直ス。曲ノ留「誠にうへなかりけり」ト向。「富士山の謂」ト謡。「扱々向ひの」ト下ニテ角掛ル。「扱は浅間大菩薩の」トシテニ向。「行方知らす成にけり」ト返ニ直ス。中入。狂言シヤベリ。ワキ説賦ナシ。出羽。「かゝりけれハ」ト天女ニ向。「抑是ハ」トシテニ向。「不老不死の仙薬を漢朝の勅使にあたへ給ふ」ト天女ワキヘ袋ヲ渡ス。ワキ請取前ニ置。舞ニ直ス。舞ノ跡向ズ。楽ノ跡「先我朝ハ」トシテニ向。「勅使ハ二神に御暇申」トシテニ向。手ヲツキテ「漢朝さして」ト、ワキ袋ヲ両手ニテ持乳ノ通りニ上ヘニテ持角掛立三足分ハリ其儘出ル。「かくや姫ハ紫雲に乗し」ト左ヘ廻リ脇座ニ向。行ナリ下ニ居袋ヲ置。下ニテ又右ヘ廻リ脇正面ヘ直ス。入様常之通り。又「勅使ハ二神に」ト手ヲツキ、「漢朝さして」ト袋ヲ前ノ如ク持下ニテシテノ表ノ方ヘハツシ立、シテノ表ヲ通り直ニ幕ヘ入ル。○連ハ常之通シテノ跡ヨリ入ル。是ハシテノ好ニヨルベシ。装束《玉井》通。

(4) 《礼脇》

音取・置鼓。幕ノ上所ハ橋掛長短ニヨリテ心有ヘシ。名ノリ事ヨリハ少シヲソキ方ヨシ。一鉢笛ニ合セテ出ル。幕ハナシ常ノ脇能ノ通り。狩衣サバキサソウ袖有。舞台ヘ入一ノ松辺合足ハコビヲツメル心ナリ。シテ柱ヲ越ルト直ニ正面請端ノ名ノリ座ヨリ少シ上ニヘアガリ右ノ足ヲヤリコシ右ノ手足ト一所ニ前ヘ出シ「ヒウロルヒヤ」

ト右ノ手足ヲ顔ノ付ケテ右ヘヒラキ下ニ腰ヲ引立テ居。左ノ手ヲ肩ノ所ニヨセ右ノ手ヲオロシ「ヒヤウロヒヤ」ト左ノ手足顔ニ付ケ又左ヘヒラキ面ヲ正面ニ直シ左ノ手ヲ膝ヘヨセ腰ヲキヒスノ上ヘニヲロシ「ヒイヤヒ」ト笛ノヒシキニ付テ両手ヲ上ケ面ト一所ニ手ヲツキシキヲシテ大鼓ノ頭ト頭ニ付テ躰共ニヲキ左ノ手ヲ上ケ右ノ手ニテ左ノ露ヲ取左ノ手ニ持。又右ノ手ヲ上ケ左ノ手ニテ右ノ露ヲトリ右ノ手ニ持テ両手ヲ胸ノ所ニ当テ中ノ頭ニ付テ両手ヲ帶ノ所迄下ケ「ヤヲハ」ト付テ右ノ足ヲ左ノ方ニヨセ脇座ノ柱ノ右ノ方ヘ向立テ又頭ト頭ニ付テ右ノ手ヲヒラキ露ヲハナス。狩衣サハキナリ。右ノ足ヲヒネリ躰共ニ左ヘ向。面ヲ地ノ上ヘ向。左ノ手ヲヒラキ露ヲハナス。サソウ袖ナリ。夫ヨリ常ノ通りニ「ハフヒ」ヲツメテ正面ヘ出。右ニテ留リ、キヒスヲ上ケ立カヘリ連ト立向次第謡。跡ハ常ノ通り也。○連ハ名ノリ事ノツレノ通跡ニ付テ出。脇端ノ名ノリ座ニ下ニ居ル時ワキヘ向テ橋掛ニ下ニ居ル。脇立ト一所ニ立テ舞台ヘ入ル。常ノ通り立向。

一 唐冠事ハ決テ禮脇ニセス。

一 右ハ《翁》附能ノ時ハ是非禮脇也。

一 禁裏・將軍家・大臣家ニカキリテ《翁》ナキ時モ禮脇ニスル事
宮方大臣家ハ常ノ脇能ニテモ苦シカラス。其外ハ主君外之高家ニテモ貴人ヨリ好ナケレハ《翁》ナキ時ハ決テ勤サル事。但シ

禁裏・將軍家ニテモ唐冠事ハ決シテ禮脇ニセサル事

(5)《和布刈》(連式人)

始メ大小ノ前ニ台出ル。上ニ小屋台乗ル。次第五段三段目頭ニ付テ幕ヲ上ル。幕ハナレシテキビスヲ上ズニ常之通狩衣サハキサソウ袖有。舞台ヘ入テ脇能ノ通ニ入。シテ柱ヲ越スト四段目打掛常ノハヤ目頭ノ場所台ノ角ニテ足ハ留スニ四段目頭ニ付テ狩衣サハキハカリ

シテ直ニ常之通正面ヘ出テ右ニテ留リキビス上ス真中ヘカヘリ連ト立向次第謡尤三遍ナリ。打返シニ脇能ノ通り左右・左ノ名ノリ足有テ「抑是ハ」ト謡。「扱も当社」ト角カケ「今夜寅の時」ト又正面ヘ直シ「執行はやと存候。」ト達拝シテ一足引。「有難や」ト謡。「年の始」ト常ノ通り連ト立向。道行「けふの神祭」ト打切ニ正面ウケ「心を致し」ト左ヨリ出、「様々に」ト右ニテトマリキビス上ズ「君の恵を」ト常之通立カヘリ連ト立向。半着也。謡スミ立廻ラズ直ニ正面請「弥信心を致シ」謡。「御神事を執行ふするにて候」ト連ニ向「然へう候」ト脇座ニ行下ニ居ル。○連ハ常ノ通ナリ。シテ小謡「しわさに至るまで」ト打切ニ向。立ズニ問答。其俣ウタフ。「是ハいやしき」トツレニ向。「我ハ又」トシテヘ向。「海原やはかたの海も程近く」ト打切ニ直ス。「よみし心も理や」ト向。クリ前詞ナシ。「天地神」トクリニ直ス。「其御産の時」トサシニ向。上ノ跡「此早とも」ト直ス。「心の如くなるへし」ト打切ニ向。「隠れ入らせ給ひけり」ト返シニ直ス。中人狂言シヤヘリ。脇説賦ナシ。「汀に神幸」ト天女ニ向。舞ニ直ス。早笛ニ天女脇ノ上ヘ来ル。脇・ツレ共ニ下ヘサカリ天女上ミニヲク。又脇ツレノ跡ヘ来ルモ有。是ハ此方カマハズ。早笛ノ中ニ脇狩衣ノ肩ヲ上ル。尤ワキ正面ウケタル俣ニテ後ロヨリ脇ノ後見トル。「龍神則」トシテニ向。「はらふや塩瀬に」ト直ス。舞働ニナリ下ニテ右ヘ廻リクツロキテ扇ヲ連ノ後ロニヲキ右ニ松明ヲ持左ニ鎌ヲ持。直ニ脇正面ウケ腰ヲ立テイル。舞働打上ニ其俣立テ「神主松明」ト松明ヲ上ナカラ台ヘ向。「振立て」ト台ヘ上ル迄ニ二ツフリ松明ヲ乳ヨリ少下ヘサゲ左ヨリ台ヘ上ル。直ニ左ヘ廻リ正面ウケ返シノ「神主松明」ト左ノ足ヲ前ヘ出シ松明ヲ左ノ方ヘフリアゲ面ハ目付柱ノ下ヲ見「振立て」ト右ヘサゲ又左ヘヨセ、又右ヘ上ケナカラ右ノ足ヲ引脇座ノ下ヲ見。松明ヲ後ロヘナゲ捨面

ヲ正面へ直シ前へ一足出ナカラ鎌ヲ右ニ持台ヨリ一足二前へ飛下り左ヨリ一足出グワツシ又向へ左ニグワツシ「つたひくたつて」ト其俣立テ右へ飛カヘリ躰ヲ脇正面へウケテ右ノ膝ヲツキ腰ヲ引立テ「半町斗の」ト面ヲ橋掛ノ方へ向。脇正面ヨリ目付柱ノ方へ見廻シ夫ヨリ面ヲ左ノ方前へ下ケ左ノ手ヲ出シ若布ヲ持心ニテ「海底のめをかり」ト鎌ニテ左ノ手ノ下ヲカキ直ニ立チ「かへり給へハ」ト脇座ニカヘリ右へ廻り台ノ左ノ角ヨリ脇正面ノ方へ見廻シナカラ一足出。「波白妙の」ト跡へ一足引下二居。鎌ヲ後口へ置。扇ヲ持。脇正面へ直ス。天女入テ又元ノ所へ上リ居。天女シテ柱ヲ越テ常之通リ入。但狩衣肩上ケタル俣入ルナリ。

一 台ノ上小屋台始メハ真中ニ有。早笛ノ中ニシテノ後見ニ小屋台ハカリ台ノ上ニテ左へヨセサセル。是ハ頼候事。

一 上掛リノ時ハ音取置鼓真ノ名ノリナリ。仕方ハ《玉井》ノ通。名ノリヨリ跡ハ常之通り違ズ。

(6)《葵上》(連一人)

始シテツレ神子出テ脇座ニ居。衣階子ノ所へ右ヲ上ニシテ出ス。後見引テワキツレ○大臣出ル。端ノ名ノリ。達拝シテ笛ノ上ニ行。下ニ居。神子へ下ニテ向。「頼而梓ニ御かけ候へ」ト謡。又直ニ角へ直ス。「若か様の人にててもや候らん」ト神子へ向。「大方ハ」ト謡。「夫妻婆電光」ト直ス。シテハハアシライナシ。「打のせ隠れゆかふよ」トシテトクトクツロキテ其俣ニテ「いかに誰か有」ト云。狂言「御前に候」ト狂言ニ向。説賦濟テ直ス。狂言橋掛へ来リワキヲ呼出ス。△脇呼出ヲ聞テ幕ヲ上出ハナレノ所ニテ正面ウケ「九の」ト謡。「いか成者ぞ」ト狂言へ向。「先汝ハ先へ行候へ。」ト又正面へ直ス。狂言大臣へカ、ル。○大臣「心得有。」ト一寸狂言へ向又直ス。△脇狂言ノ行ヲ見テ舞台へ入。シテ柱ヲ越ト直ニ正面ウケ

橋ノ名乗座ノ辺へ出ル。○大臣其俣立右ヨリフミ出シ脇へ向一足出脇ノ左ノ足ニ付テ「夜陰ト申」ト謡掛ル。△脇連ニ向「別行の」ト謡ナカラ一足ヨル。○連「あれなる大床」ト衣ヲミル。△脇左ノ足ヲヒネリ衣へ向。右ノ足ヲフミ出シ右ノ方衣ノ上ヨリ下へ見ヲロシ「是ハ」ト謡ナカラ左ノ足ヲフミソロへ「以の外の」ト謡。「頼て加持」ト大臣ニ向。○大臣モワキへ向「急御加持有て給り候へ」ト謡。

△ワキ「心得申候」ト謡。右ヲヒネリ大小ノ前ヘクツロキ。○大臣角掛跡へ引下ニ居ル。△脇クツロクト扇ヲサシ珠数ヲ右ニ持イノリ打掛ル。二ツ頭聞テ下ニテ右へ廻リ正面ウケ立其俣出衣ノ前へ行。衣ヨリ二尺程手前ニテ右ニテ留リ衣ノ上ノ方ヲ見ル時右ノ足ヲフミ出シ真中ノ下へ直シ左ノ足ヨリ跡へ三足引下ニ居面ヲ正面へ直シ「行者ハ加持」ト謡。「赤木の珠数の」ト珠数ヲカケ衣ヲミ「ささりく」トイノリ「東方に降三世明王」ト躰シツム心有ヘシ。仕手ワキノ右ノ方へ出テ衣ヲミル。ワキイノリヲヤメ面ハカリニテシテヲ見。跡へ立テ引躰共ニシテノ方へ向。シテノ下ヲイノリ「なまくさまんた」ト謡ナカラ躰ヲオキル。シテ立ト一所ニ立。シテ上衣ヲヌクト側へヨリイノリ口伝。随分シテノ内へ入テイノリハナレヌ様ニイノリ形ハシテニヨル。心有ヘシ。イノリノ留ニワキヲ跡ヘワイツメテシテ直ニ衣へ手ヲ掛ル。ワキ引クウチヨリイノリヲ留。左ノ足ヨリフミ出。左ノ方表ヘグワツシ右ノ手ニテ衣ヲオサヘシテへ其俣ニテ面ハカリ向。「法力つくへきかと」ト右ノ足ヲ跡へ引付シテヘ真向ニナリ珠数ヲカケ立イノリ口伝。「知我身者 成仏」ト《黒塚》之通シテヲ打、跡へ引ナカラ表ヘヒラキシテヲ見ル。「是までぞ怨霊」ト右ノ足ヲ引付テシテヘ真向ニナリ下ニ腰ヲ立テ居。「読誦の声を」ト立、左へ廻リ大臣ノ上へ行角カケ下ニ居。扇ヲヌキ珠数ト持カヘル。入様神子ワキ大臣ト順ニ入ル。尤ワキ其俣立橋掛へ向入ル事。

(7)《土蜘蛛》(連式人後テ)

シテ中入済早鼓打出シ頼光台へ腰ヲカケルト幕ヲ上走りテ出、舞台へ入。シテ柱ノ側ニテ左ヤリコシ留リ右引下ニ腰ヲ立テ居手ヲツキ早鼓打留「御声の高く」ト謡。「畏て候」ト謡テ面ヲ上ケヲキ頼光ヲ見テ立。前へ三四足出テ下ニ居又手ヲツク。「方々めて度御事にて候」ト謡。ヲキ「又御太刀つけ」ト舞台先キ真中ヲ見、「夫々跡ヲ見申に」ト左ノ足ヲ前へヨセ右ノ足ヲ跡へヒラキ橋掛ノ方ヲ見廻シ「ちのなかれて候」ト又面ハカリ中へ返シ「此ちをたんたへ」ト躰共ニ頼光へ向。「退治仕らふする」ト又手ヲツキ「畏て候」ト謡。下ニテ足ヲ立テ直シ後口へ向早鼓ニテ入也。狂言シヤヘリ済大小ノ前へ作物台出ル。一声越ス。幕ヲ上出ル。連式人跡ニ付出ル。△ワキ幕ハナレシテ常之通出一ノ松ノ辺ニテ正面請右ノ手ヲ前ニサシ又右へヒラキ左引留テ「土も木も」ト謡。○連ハ跡ニ付出正面ウケテ謡。△(ワキ)「宿ならん」ト作物ニ向一足出打上テ「其時独武者」ト謡○連も作物へ一所ニ向。△ワキ「ミやうこんをた、ん」ト右ノ足ヲフミ出シ「此塚を」ト左ノ手ヲサシ左ノ足ヲソロへ「くづせや」ト右へ廻リ連へ向。「よばわりさけふ」ト左へ廻リ舞台へ入り脇座ニ行。右へ廻リ作物へ向。○連モ跡ニ付行順ニ並作物へ向。△ワキ「火多んをはなち」ト少シ左ノ足ヲヒネリ作物ノ上ヲミテ「水を出す」ト右ヨリ静ニ三足程出作物目通へ面ヲ直シ右ノ足ニテ留リ「あやしき岩間」ト引マハシ下スト右ヨリ引左へヒラキ下ニ左の膝ヲツキ右ノ足ヲフミ出シ太刀ニ手ヲカクル。尤シテノ面ヲミテサカリ初終目ヲハナサズイル。○ツレモ一所二下ニ居。脇之通太刀ニ手ヲ掛ル。△ワキ「其時独武者」ト右ノ足ヲ引付立シテへ向一足出ル。○連モ同断。△ワキ「汝王地に」ト左ヨリ二足程出、「其天罰の」ト左ニテトマリ「劔に当りて」ト左ノ足ヲ正面ノ方へヒラキ「手を

手をとる組」ト右へヒラキヲモ連ト右ノ手ヲ組。(但シ手ヲ組ワキ手ニ目ヲ付テヲモト取組事)○ヲモ連跡連ト手ヲ組。△ワキ「か、りければ」ト其俣左ヨリ一足出「ち、うのせいれい」ト手ヲ放ス。○連モ手ヲ放ス。△脇「くりためて」トシテノ前へ行。左ノ足出ル。次ニ右ノ手ヲ出シ右ノ足ニテ留リ身ヲ入テ「なけかけ」トシテ糸ヲワキヘカケル時右へヒラキ脇座迄流れ「手足にまとわれ」ト右ヨリ向へ左ニクワツシ又左ヨリ向へ右ニクワツシ直ニ右へフリ返リ立。直ニ太刀ヲ拔下ケ右へ飛カヘリテ右へヒラキ「たをれふしてぞ」ト其俣ドウド下ニ居。「見えたりけり」ト立直ニ太刀ヲ上カサシ右へヒラキ○連モ脇上所ニ向フ太刀ヲヌキ右へヒラキ太刀ヲ上ケカザス。△ワキシテ舞働。台ノ上ニテ拍子ヲフミ下へ飛所ヘカ、リ一寸留リシテト打違其俣太刀ヲ高くカザシ但シ太刀ノ切先ニ氣ヲ掛テ橋掛へ行。一ノ松ヨリ余程先ニテ右へ飛カヘリ下ニ右ノ膝ヲツキ左ノ足ヲフミ出シ左ノ手ヲ前へヨセ太刀ヲ右へヒラキシテヲ見テ待イル。○ヲモツレワキノ打違フト直ニ其俣ニテ打違左へ廻リ座ヘカヘリ太刀ヲサケテシテヲミテイル。・跡連ハヲモツレの打違フ中ニ太刀ヲオロシ前ヘカサシ左ノ手ソヘテ台ノ右シテ柱ノ方角へ行。太刀ヲ上待。シテ脇座ノ方ヨリ橋掛ヘクル所ニテ前へ一足出表ヘキリ違座ヘカヘリ太刀ヲ下ケシテヲミテイル。△シテワキヘ打カカル時、脇立ナカラ太刀ヲ上、左ノ手ヲキツ先ニソヘウケシテハズスト左ノ手ヲ放シ太刀ヲ下シ右ヨリ左ヘクワツシナカラシテノスソヲハライ直ニ立。太刀ヲ前ヘカザシ脇座へ行。右へ廻リ右へヒラキシテニ向。太刀ヲ上カザシ打上テ「然とハ」ト謡。○連モ太刀ヲ上ル。△ワキ「神国王地の」ト左ヨリ二足程出、「彼土蜘蛛を」ト左へヒラキ太刀ヲ前ヘヲロシ左ノ手モ前ヘヨセテ太刀ヘソヘル心ナリ。面ハシテへ殘シ「中にとりこめ」ト面モ直シ目付柱ノ方へ行。シテへ向。中へ

二三足程ヨリ太刀ヲ上ケナカラ左ヨリ引右ヘヒラキ「劍の光」にトシテノクル時左ヨリフミ出太刀ヲシテノ前ヘ出シ又右ヘヒラキ太刀ヲ上「少し恐るゝ」ト左ヲ引付太刀ヲ上テ真向ニナリ一ツキリ「きりふせく」トシテノ方ヘヨリナカラツメテ二ツキル。但シ三ツメ太刀躰ヲハマリ二ツメシテノ肩ニアタル。シテ下ニイルト台ノ右ノ角ノ所ニテ太刀ヲサケ左ヲヒネリ右ヘヒラキ「くひ打落し」トシテヘ真向ニヨリ足ヲフミソロヘ両手ヲアケシテヤキル。左ノ手ハ太刀ニツケズ。左ノ足ヲヒネリ右ヘ廻リ正面ウケ太刀ヲサシ右ヘヒラキ太刀ヲカツキ脇正面ヘ面ヲ直シ「帰りけれ」ト左右拍子ヲフミ太刀ヲオロシ下ケテ幕ヘ入ル。○連ハ脇目付柱ノ方へ行時ニシテ二向太刀ヲ前ヘヤロシ左ノ手ソヘ三足出、ヒラキ太刀ヲ上ル。跡ツレモ同断「きりふせく」ト脇ト一所ニ二人共ニ三ツ切ル。但シ三ツメ躰ハテリテ切ル。脇ヒラクト跡ヘ引。シテヘ向、シナリニテ下ニ腰ヲ立テ居。太刀ヲカツキ脇拍子ヲフムト立太刀ヲ下ケ跡ニ付入ル。但シテワキノ次ヘ入。其跡ヨリ連式人入事モ有。此時ハワキシテ連二人同幕ナリ。

一 舞動ノ内橋掛一ノ松辺ニテトヒカヘリ下ニ右ノ膝ヲツキ左ノ足ヲフミ出シ左ノ手ヲ前ヘヨセ太刀ヲ右ヘヒラキシテヲ見テ待イル。シテワキヘ打カクルトキ脇立ナカラ太刀ヲ上左ノ手ヲ切先ニソヘウケシテヒラキ糸ヲカケル時脇太刀ヲ右ノ脇ニカイコミ左ノ手ヲロシイ糸ヲカケルト幕キハヘ迄流待イ。シテクルトスソヲハライ直ニ立太刀ヲ前ヘカサシ脇座ヘ行。跡同事。右ハ両様ニ有。但上掛リハ是非如ナリ。一「手足にまどわれ」ト三ツグハツシ立ナカラ脇座迄流、「たをれふしてぞ」ト下ヘドット安座シ直ニ左ノ膝ヲ立太刀ヲ拔。右フミ出シ立右ヘヒラキ太刀ヲ上カザスモアリ。

一「此塚を」ト手ヲサ、ズニモスル事。足ハ一足フミ出ス。

(8)《咸陽宮》連四人

始台大小ノ前ヘ出テ雷声打出ス。シテ連女脇三人大臣出ル。シテノ跡ニ付テ出。シテ台ヘ上ルト女脇連座ヘ行。大臣三人。《つるかめ》の通。脇正面ヘ出、下ニ居ル。サシを合謡フ。初同済テ一声コシ。△ワキ幕ヲ上出ル。幕ハナレ有。キビスハ上ズ。常之通出一ノ松ヨリ少シ先ニテ右ヘ廻リツレト立向。○ツレ連跡ニ付出。脇ト立向。「思ひ立」ト謡。△ワキ「嵐哉。」ト右ヘ向。板付ノ方ヘ立廻リ舞台ノ正面ウケテ立イル。掛合イ謡。○連ハ左ヲフミ出正面請テ立懸合謡。○ワキ「石に立つ」ト右ヲヒネリ元ノ所ヘ立廻リ連ヘ向。○連モワキヘ向道行謡。△ワキ「遠山の雲に」ト初テノ通立廻リ「漸行ハ」ト左ヨリ三四足出「名も高き」ト左ニテトマリ「咸陽宮に」ト右ヘ廻リ板付ノ方ヘ本着也。謡済立廻ラズ直ニ左ヘ廻リ正面ウケ「急候程に」ト謡。「先々案内」ト右ヘ向、ツレニ向。○連ハ道行済テ正面ヘハウケズニ脇ヘ向シ俣也。△脇左ヘ廻リ舞台ヘ向。二三足出狂言呼出シ説賦有。留リシ足ヨリ一足引狂言ニ向。「心得申候」ト右ヘ廻リ板付ヘクツロク。連ノ方ヘ角掛テ。□連ハ直ニ左ヘ向、板付ニクツロク。狂言上ノ大臣ヘカ、ル。○大臣下ニテ向説賦。「更ハ其由奏聞申さふするにて候」ト云。シテヘ向立。前ヘ二三足出下ニ居。手ヲツキ「いかに奏聞」ト謡。立右ヘ廻リナカラ「いかに誰か有」ト云テ元ノ所ヘカヘリ左ヘ廻リ狂言ニ向下ニ居。「急庭上迄」ト謡。又元ノ如ク座ス。狂言ワキヘカ、ル。△脇「是に候」ト謡ナカラ立左ヘ廻リ狂言ヘ向二三足出ル。○連ハ直ニ立右ヘ向一二足引テ狂言ヘ向。△脇説賦済テ左ヒネリ舞台の正面請三足出ル。○連モ正面ウケル。△脇「荊軻はいけん」ト謡。「儀式にしたかつて」ト右ヲヒネリ左ヘ向。面ヲ少シ下ケ左ハ引右ヘヒラキ「雲上はるかに」ト屋タイノ上ヲミ、「三里か間を」ト躰ヲ橋掛ノ形リニ直シシ

テ柱ノ方ヘ向○連モワキノ方ヘ向。△ワキ「荊軻ハすてに」トシテ柱ノ少手前迄行留ル。○連ハ「上りかねてぞ」ト其俣下ニ腰ヲ立テイル。△ワキ「あゝ不覺なりとよ」ト右ヘ廻リ連ヘ向。「実理りとて」ト連ノ前ヘつか／＼ト行、下ニ居。両手ヲカケ連ヲ引立一所ニ立手ヲ放シ脇ハカリ跡ヘ三四足引「ゑんしを」ト返シニ正面ヘウケル。連モ二足出正面ウケル。○大臣三人共ニ「帝ハ是を」ト謡ナカラ立テ笛ノ上ヘ行。右ヘ廻リ角掛下ニ居ル。△脇。連二人共ニ「燕使の参内を」ト台ヘ向。「舞陽荊軻ハ」ト謡ナカラ目付柱ヨリ正面ノ方ヘ出、左ヘ廻リシテニ向。一足引下ニ腰ヲ立テイ。手ヲツク。△連ハ「先秦舞陽」トヲキ扇ヲヒラキ両手ニ持台ノ前ヘ行。腰ヲ立下ニ居、扇ヲミセ「上覧に備へ」ト扇ヲタ、ミテ指ナガラ立、地ノ方ヘ向立。シテノ左ノ方台ノ脇ニ行。右ヘ廻リ正面ウケ跡ヘ引下ニ居。○大臣其俣ニテ「帝ハゑめる」ト謡△脇「御心もとけて」ト下ニテ右ヘ廻リ正面ウケ扇ヲヒラキマカラヌ様ニ両手ニ持、立ナカラ左ヘ廻リシテヘ向。但シ扇ヒラキ様心有ヘシ。「其時荊軻」ト謡ナカラ台ノ前側ヘ行腰ヲ立下ニ居。扇ヲミセ「上覧ニ備へ」ト扇ヲタ、ミ指ナカラ立右ヘ廻リシテノ右ノ方台ノ横ニ行左ヘ廻リ正面ウケ跡ヘ引下ニ居ル。「既に立さり（ニテ見テ直ニ立。ツレモ同断）給んとす」トシテ立ト直ニ立右ノ足ヨリ台ヘ上リ左ノ足ヲシテノ後口ヘフミ込左ノ手ニテシテノ後口ヲ持。右ノ手ニテシテノ袖ヲ持。○連モ直ニ立。左ヨリ台ヘアカリ右ノ足ヲ後口ヘフミ込右ノ手ヲ後ニカケ左ノ手ニテ袖ヲ持。「御衣の袖にむづとすかつて」ト△脇連シテヲ引スヘ下ニ腰ヲ引立テ居イ。ワキハ右ノ膝ヲ前ヘツキ、左ノ足ヲバ立テ右ニテ台掛ノ下ノ劔ヲヌキ向ヘミセ「さしあて奉りけり」トシテノ胸ニキツ先ヲアテシテノ面ヲ見イル。○連モ左ノ膝ヲツキ右ノ足ヲ立腰ヲ引立シテノ面ヲミイル。△ワキ「扱秦舞陽何とあるへ

きぞ。」ト面ハカリ連ヘ向。連モ面ハカリ脇ヘ向謡。△ワキ「さあらハ片時の暇を」トシテヘ向劔ヲ右ノ膝ニ下ケテ躰ハ其俣居ル。○連モ又シテヘ向。△ワキ「いかに花陽夫人」ト謡出シ右ノ膝ヲ右ヘヒラキ腰ヲキビスノ上ニヲロス。尤キヒスヲ立テ面ハシテヘ向イル。○連モヒスノ上ニ腰ヲオロシ左ノ膝ヲ左ヘヒラキシテヲミテイル。△ワキ「雲井に渡れる」ト少シ脇座ノ方下ヘ面ヲハヅシ夫ヨリ段々ニ中ノ方下ヘミ廻シ中ノ方ヨリ又前ヘトリ「二三遍の琴の音を」ト時分迄ニ劔ノ側台ノ下ヲ見ル。○連ハ「雲井に渡れる」ト台ノ右ノ方向下ヘ面ヲハヅシイル。△ワキ「御衣の袖を引きつて」トシテ台ノ前ヘ飛脇座ヘ行ク。脇・連一所ニ其俣左右ヘ飛落両手ヲ一寸ツク。連ハ直ニ右ヘ廻リ笛ノ後口ヨリ切戸口ヘ入ル。△脇ハ直ニヲキ腰ヲ引立テ面ハカリニテ台ノ上ヲ見。次ニ立劔ヲ下ケテ右ノ足ヨリ台ヘ上リ又面ハカリニテ脇座ノシテヲミ其俣向ヘ飛下リ。但シ飛様正面ノ方ヘ躰ハ横ニナル。左ヨリ引右ヘヒラキ劔ヲ上ヘヨク右ノワキヘヲロシ仕手ヲ待。シテクル所ニテシテヲ左ヨリフミ込裏ヘキリシテ橋掛ヘ行。脇ハ直ニ右ノ足ヨリ脇座ノ方ヘ行。正面ヲ見廻シナカラ右ヘ廻リ台ノ右ノ角ノ所ヘ行。面ヲ又左ヘトリ脇正面ノ方ヘ向キ。但シ仕手柱上ミノシラスヘ向テヨシ。斯る右様ノ仕方ハシテヲ見ル所ユヘヨケイヲトリテシテヲ見レハ仕方相ソカルユヘノ事ナリ。面ヲソムケルニ外ニナラヒナシ。多ク如斯ノ仕方有之事。左ノ足ヲツカヒ右ノ足ヲ橋掛ノ方ヘフミ込立「かくれさせ」ト橋掛方ヘ面ヲナヲシ「荊軻ハ」ト右ノ足ヨク跡脇座ノ方ヘ四五足引右ヘ一ツ廻リテトメニ直ニ右ノ裏ヘヒラキ（目ヲ付ミテ）正面ヲ後口ニシテ仕手ヲ見。劔ヲ上ヘアケ左ノ手ヲツ先ニソヘ劔ヲ前ヘオロシ腰ヲシヅメ又劔ヲ目通ヨク少シ高ク上腰ヲノバシ劔ヲシテノ方ヘ拔ヲスル心ニテナケ直ニ下ニ右ノ膝ヲツキドウト腰ヲ引立テ居ル。但シ安座ニテモ。

「帝又劔ヲ拔テ」ト直ニ其俣立キリ戸ヨリ入ル。○大臣ハ三人共ニ女連ノ跡ニ付幕ニ入ル。但シ劔ハサマナシ。始台掛ノ下ニサシテ出ス。

(9)《春栄》連壹人

始子方先ヘ立狂言太刀ヲ持セ供ニツレ出ル。シテ柱越ス迄子方ノ跡ニ付テ出。柱ノキハニテ《千手》之通見送り太鼓座ニクツロキ子方得与座シテワキ立右ヘ廻リ正面請端ノ名乗。達拝済テ笛ノ上之方ヘ請狂言呼出ス。「御前に候」ト聞テ狂言ヘ向。説賦済テ笛ノ上ヘ行。角掛下ニ居。狂言太刀ヲ脇ノ後口エ置。シテツレ説賦有テ狂言ワキヘカ、ル。下ニテ向セリフ済、又連ヘセリフ有テシテ舞台ヘ入。シテ柱ヲ越トワキ其俣立「春栄殿のゆかりの人」ト謡ナカラ右ヨリフミ出シシテニ向。「扱是ハ」ト跡ヘ一足引問答。「御待候へ。心得申候。」ト聞テ脇正面ノ方ヘハツシ真中迄出子方ニ向。二足程ヨリ下ニ得与居テ「いかに春栄殿に」ト謡。「そと御覧候へ。此方ヘ渡候へ。」ト謡ナカラ立。子方ノ右ノ方ヘ行。子方モ立一足出ル。ワキ子方ノ右ノ側ヘ行。シテヘ向。コシテ見テ、又右ヨリ三足フミ出シ子方ニ向ナカラ「あれに立たる」ト謡。「追返し候へく。」ト謡ナカラ右ノ足ヲヒネリ笛ノ上ニ行。右ヘ廻リシテヘ向ナカラ「最初の人の」ト謡問答。「何とて卒爾なる事を」ト右ヨリ一足引「委語られ候へ」ト謡。又初ノ如ク真中ヘ出子方ニ向、三足程ヨリ初ヨリハ少近ク留ル。下ニ得与居テ「いかに春栄殿」ト謡。「此方ヘ渡候へ」ト謡ナカラ其俣立。子方ノ前行。子方ヲ引立跡ヘ右左引ナカラ子方ヲシテノ方ヘツリ心。尤身モ立。子方ノ前ヘ行。子方ヲ表ヘ引出、シテヘ向三足程出、子方ヲツキ出シ、直ニ左ヘ廻リシテヘ向。直ニ廻リ笛ノ上ヘ行。右ヘ廻リ角掛下ニ居ル。初同済テ「言語同断」ト其俣「我等も落涙」ト謡ナカラシテニ向。「や。」ト面ハカリニテ橋掛ヲ見。

左ハ立。「何誠か」ト謡ナカラ橋掛ヘ真向ニナリ左ノ足ヨリ一足出ナカラ「荒何共なや」ト謡ナカラ右ヲヒネリシテヘ向。一足引下ニ居ル。「痛なから力なき事」ト謡ナカラ下ニテ子方ヘ向。種直ハ「急」トシテヘ向。「夫ハ兎も角にて候」ト謡。角ヘ直ス。此間アシライナシ。曲ノ上「所ヲ思ふも頼母しや」ト扇ヲサシ子方ニ向立。右ノ方側ヘ行。両手ニテ子方ヲ引立前ヘ四五足出正面ヘ向ケ向イヲ三尺程アケ子方ノ後口ニ廻リ下ニスヘテ立ナカラシテヘ向。跡ヘ右ヨリ一足引下ニ居。左ノテヲシテヘサシ目付柱ノ方子方右ノ方四尺程ヲキテシテノ座ヲ右ノ手ヲサシナカラ向ク。座ヲオシユル心ナリ。直ニ立左ヘ廻リ笛ノ上ヘ行ナリ下ニ居。右ノ肌ヲヌキ太刀ヲ左ニ持テ「くわうせんちう」ト直ニ立。右ヘ廻リ直ニシテヘ向。シテト子方トノ後口真中比迄出「我等ヲ照し給へと」ト右ヲヒネリ子方ヲ見。但シ行ナリニシテヲ見子方ヲ見ル。「深くそきせい」ト又右ヲヒネリ脇座ト地トノ間ヘ向行子方ノ左ノ方ヘ行。左ヘ廻リ子方ニ向。「花や咲ぬらん。」ト左ヨリフミ出太刀ニ手ヲカケル。○ワキ連、「深くそ祈誓申たる」アタリニテ幕ヲ上ル。橋掛長短ニヨリ中比迄出テワキノ太刀ニ手ヲカケルト足ヲトメ「静り給へ」ト地ノ中ヨリ謡カケル。△ワキ「すハ又早打」ト謡ナカラ太刀ノ手ヲ放シ右ノ足ヲヒラキ連ヘ向。「遅しきれとの」ト又右ノ足ヲフミ出太刀ニ手ヲカケ子方ニ向太刀ヲ拔右ノ足ヲ跡ヘヒラク。(但シ太刀ヲ上ヘハトリ右ノワキヘヲロス。「あ、嬉しく」ト謡ナカラ面ヲ連ヘ向。鉢ヲ直シ太刀ヲオサメ直ニ左ヘ捨テ太鼓ノ前迄行。立ナカラ左ノ手ヘ文ヲ受取ル。○連「あ、嬉しく」ト聞テ舞台ヘ入脇ニ立ナカラ文ヲ渡シ直ニ右ヘ廻リ太口座ヨリ切戸ヘ入ル。△脇直ニ脇正面ヘ角掛端ノ名乗座ノ辺迄出テ下ニ腰ヲ立テ居。文ヲヒラキ「何々」ト謡。「残りハ先々」ト左ノ手ノ少シ外ヲ見。文ヲ二ツニ裏ヘ折右ニ持下ニテ子

方へ向。立右ノ側へ行下二居。左ノ手ニテ子方ヲ引立脇モ一所ニ立。直ニ左へ向。笛ノ上へ行ナリニクツロク。但子方斗リ引立。脇ハ下ニテ直ニ笛ノ上へ行。クツロキテモヨシ。文ヲ巻袂ニ入。右ノ肌モ入。扇ヲヌキ持右へ廻リ角掛ル。「哀なりけれ」ト謡済。其俣狂言呼出ス。シテノ右ノ上へ出ル。説賦済テ直ス。シテ少刀ヲサシ正面へウケテシテ二向。「いかに種直」ト謡。此中ニ太刀ヲ右ノ側地謡ヨリ出セル。「けふハ最上」ト謡ナカラ右ニテ太刀ヲトリ下ニテ子方へ向ナカラ立左ノ手ニテ柄ヲ持子方ノ右ノ方へ行下二居。太刀ヲ取直シ左ノ手ニテハヲ手前ニシテ子方ノ右ノ方へ置。直ニ扇ヲヒラキ「重て千秋」ト酌ヲスル。「猶悦ひの」ト下ニテ表へハツシ立。シテ二向行下二居。シテへ又酌ヲシテ扇ヲナラシ直ニ下ニテ目付柱ノ方へ向立。五六足行ナリニ左ノ足ヲヤリコシ又左ヨリ跡へ表ノ方へヒラキ「朝日影」ト目付柱ノ方へ面ヲ残シテ見、「伊豆の三嶋」ト左へ大廻リヲシテ笛ノ上へカヘリ左へ廻リ正面請右ノ手ヲサシ跡へヒラキ「かしんれい」ト右左ト拍子ニツフミ「此時ヲいふぞ」ト左右ヲシテ扇ヲ打込角へ直シ左ヨリ一足引下二居。扇ヲタ、ミ「猶々廻る」ト子方脇へ酌スル。ワキ向テ扇ヲヒラキ請直ニタ、ミ角へ直ス。「千世に八千世を」トシテ脇へ酌スル。ワキシテへ向。扇ヲヒラキ酌ヲ請「万歳楽」トシテ正面ウケテ「いかに種直」ト謡。舞ニ直。「親子の契り」ト子方へ向立行下二居。子方ヲ引立一所ニ立。シテノ表ヲ通り目付ノキハへ行子方ヲ正面へムケ立。ハシノ名乗座ノ迎へ行。子方ニ向下居。尤子方ノ真後ロナリ。「三嶋の宮の」ト手ヲツキ「親子兄弟ノ」トヲキ直ニ立。子方ヲ後ロヨリ引立右へ廻シ橋掛迄早クツレテ入り柱ヲコヘテ子方ヲ放シ跡ニ付幕へ入ル。

(10)《紅葉狩》連六人分八人迄

始シテ出謡済座ニ付一声コシテ幕ヲ上出。幕ハナレ《土蜘蛛》之通。

一ノ松ノ辺へ行正面ウケ右ヲサシ右へヒラキ面ハ舞台ノ正面へウケ「面白や頃ハ」ト謡。○連一同ニ正面請ル。太刀持ト脇トノ間一間余モアケテ立。尤此間此俣居ル。△ワキ「実面白き景色かな。」ト正面へ舂ヲ直ス。「明ぬとて」ト右ノ足ヲヒネリ板付ノ方へ向廻リナカラ正面へウケ「野邊より」ト舞台ノ板ヲ見テ右ノ手ヲサシ「山に入鹿ノ」ト右へヒラキナカラ上ヲ見、「跡吹送る」ト右へ見廻シ幕ノ方へ向ナカラワキツレノ方へ向。三四足行左へ廻リ橋掛ノナリニ舂ヲシテ「駒ノ足なミ」ト左ノ足ノ向フヲ見テ又右ノ足ノ前ヲミテ右ノ足ヲフミソロヘテ面ヲムカウヘ直シ「いさむらん」ト一ノ松ノ先迄行留リキヒスヲ上ケ打切頭ニ付テ足ヲオロシ拍子アリ。尤橋掛ノナリニ出一ノ松ノ先ランカンノ方へヨリテトマル。「ますらをか」ト右へヒラキ面ヲ初之通り正面へウケル。「道のさかしきに」ト打切ニ舂ヲ正面へ直シ「落くる鹿の」ト左ヨリ三四足出、右ニテ留リ「風の行衛も」ト右ヲヒネリ橋掛ノナリニ三四足出、右ニテ一寸留リ左ヲヒネリ正面中ヨリ脇座ニ向。右ヨリ一足出、左ニテマリ脇座ノシテヲ見ル。半着ノ心ナリ。謡済右ヲヒネリ太コ座ノ方へ向ナカラ「いかに誰か有。」ト謡。右へ廻リ太刀持ニ向。○太刀持。「いかに誰か有。」トワキへ向。下ニ腰ヲ立テ居。手ヲツク。跡連モ一同ニ下二居。舂ヲ横ニスル。但シ橋掛ノナリニ下二居ル事。太刀持「畏て候。」ト云。下ニテ左へハツシ表ヲ通り舞台へ入ル。△脇ハ其儘表ヲ通り太刀持ト入カハリ太刀持ノ居タル所へ行左へ廻リ正面ウケル。○跡ツレ爰ニテ一同ニ立。正面ヲウケル。太刀持ハ端ノ名ノリ座ノ先へ行。笛ノ上へ向。「いかに此内に」ト謡フ。狂言「誰にて」ト立向時一足引面ヲ合セ説賦「心得申候。」ト左ヨリフミ出シ右へ廻リシテ柱ノ側へ行脇へ真向ニナリ下二居。手ヲツキ「いかに申上候」ト謡。△脇「荒ふしきや」ト太刀持へ向。「よし誰にても」

ト正面請「かた／＼乗うち」ト太刀持へ向。「馬よりおりて」ト正面ウケ弓矢ヲタテニシテ右へ一所ニ持右へヒラク。尤矢ハサカサマナリ。○太刀持ハ打切ニ脇正へ下ニテハツシ立。跡へ一足引テ居ニ居ル。脇ノ跡ノ連ハカリ下ニ居。棹ヲ下ニ置、脇ノ弓矢ヲトリ脇ノ後口ノ矢モスキ棹ト一所ニ持添テ立。棹ツク。△脇ハ弓矢ヲ連取ト直ニ左へ廻リ板付ノ方へ向。扇ヲヌキ「馬よりおりて」ト返シニ舞台へ入。台ノ角ニ行。正面ウケテ立ツ。太刀持ハ脇前ヲ通ルト直ニ立左へ向切戸へ入ル。跡ツレモ一同ニ切戸へ入ル。但シ弓矢ヲ持タル連ハ棹横ニシテツカズニ入ル。其外ハ太コノ所迄ツキテ太コ座ヨリツカズニ入ル。△脇其俣問答謡。「思ひよらすの」トシテ二向。「留め給ふへき」ト謡ナカラ角へハツシ出ナカラ正面向左ニテトマル。四足ナリ。「恥かしなからも」トシテ脇ノ袖へ手ヲカケルヲ面ハカリニテ手ヲ見、又面ヲ合セ右ヲヒネリシテへ向。跡へ三足引シテヲ見ル。カマヘヲオロス。「さすか岩木に」ト左ヲヒネリ表へハツシ爰ニテカマヘヲ上ル。脇座ニ行、右へ廻リシテへ向。「菊の酒」トシテノ下ニイルヲ、シテ跡へ引下ニ居ル。尤シテ合跡ニ下ニイル。「実やこけいを」トクリニ直ス。サシニ向。「此世の人とも思われず」ト直シ「むね打さわく」ト扇ヲヒラキウケンスル。但シイウケンニツナリ。扇ノ上様ヲヤ骨ノカド面ハナノ前ヲ上面ヨリハカル。打切ニ扇ヲタ、ミ「さなきたに」トシテへ向。「露斗たに」ト扇ヲヒラキ「うけしとハ」トシテ酌ヲスルヲ請テ「思ひしかとも」ト扇ヲ下ケナカラシテノ面ヲ見。面ヲ合セルト直ニ腰ヲオロシナカラ脇正面へウケシテへ向ナリニ足ヲ組扇ノ中ヲ見ル。此時扇ノ向イヲ上ル方。「されハ仏も」と扇ヲタ、ミ其俣居ル。此時アシライナシ。舞ノ中三段目打ヲロシノ前ニ扇ヲ左ニ持《黒塚》ノ通ニネル。随分目ダ、ス様ニ。中人過狂言シヤヘリノ留ニ脇ノ左ノ方へ太刀ヲ置テ入

ル。狂言トクト幕へ入テ脇ヲキ扇ヲ右ヘトリ心有。「あら浅ましや」ト謡。「夢の告と」ト太刀ヲ面斗ニテ見ル。「おとろく枕」ト左ノ膝ヲ立。左ノ手ニテ太刀ヲトリ角掛太刀ノコジリヲ右ノ手ニテ持「天地もひゝき」ト角ヲ見ルトキ太刀ヲ下ケアラタメ、太刀ヲイタゞキ下ニテ右へ向。クツロキ扇ヲ捨。烏帽子・長絹・少刀ヲトリテサハキ髪ニテモキトウニナリ太刀ヲ左ノ手ニ持テ「ふしきや今まで」ト作物へ向。腰ヲ立少シ左へヒラキ居ル。「七尺の屏風」トシテ出ルト直ニ飛カヘリ左ノ膝ヲツキ引立太刀ニ手ヲカケル。「面ヲむくへき」ト腰ヲシツム。舞動ノ中シテキタル時太刀ニ手ヲカケル。但シ働アルトキハ太刀ノ手ヲハナシ居ル。キメルトキ手ヲカケル事。二度共同様ニ手ヲカケル。「惟持少しも」返シニ右ノ足ヲ引ツケ角直シ「南無や八幡大菩薩」と向フヲ見。心有。「心に念し」ト手ヲツキ「釵をぬいて」トシテへ向テ太刀ヲ抜き飛カヘリ立右へヒラキ太刀ヲカサシ「飛てかゝるを」トシテ台ヨリ飛トカ、リ表へキリ違イ右へ飛カヘリ右へヒラキ太刀ヲサケテ待。「むつとくむ」トシテ来リ上手ニ組。ワキハ下手ニ組。「鬼神の真中」ト太刀ヲヒラキシテノ右ノ横へアテ左へ廻リ脇シテ柱ノ方へ行時太刀ヲ右へハツシ左ノ手ハシテノ帶ヲ持テ右へ引ツケ一寸シテヲ見。面ヲ右ヘソムケ「あからんとするを」ト真中迄其俣シテニ引レ行。中ニテシテヲ見テ「きりはらひ給へハ」ト切ハライ左ノ手ヲ放シ右へ飛カヘリ右へヒラキテ右ノ膝ヲツキシテヲ見、太刀上ル。「釵に恐れて」ト右ノ足ヲフミ出シ太刀ヲ向ヘサシナカラ左へヒラキコシ立ヌ様ニ左ノ膝ヲツキ、シテ立台ノ方へ行ヲ見テ其俣立テ行。シテ台へ上ル所ノ後口ヨリ左ノ手ヲ肩ヘカケ引ヲロシナカラ台ノナリニ右へヒラキ右ノ膝ヲツキ太刀ヲ右へヒラキ「さし通し」ト太刀ニテ横ニ打ナカラ右ノ足ヲ左へヨセ立。フミソロへ「たちまち」ト《土蜘蛛》ノ通ニ両手ニテ

キリ直ニ右へ廻リ正面へウケ右ヲ残シ右へヒラキナカラ太刀ヲカツキ「おそろし」ト角掛「けれ」ト左右の拍子ヲフミ太刀ヲオロシ幕へ入ル。

(11)《蟻通》連式人

一 次第・名ノリ・道行・半着也。道行スミ、立廻り、正面請ル。○連ハ直ニハツシ表ヲ通り常ノ通り座ニ行。ヲモ連ハ行ナリ下ニ居。太刀ヲ置テ扇ヲヌキ持。脇正面ウケル。△脇ハ正面請ルト直ニ「荒笑止や。」ト謡。「しかも乗たる」ト左ノ方ヲ見。左ノ足ヲ引「駒さへふして」ト右ノ足引テ安ザシテ面ヲ前へ直シ下ヲ見。「前後をわきまへす」ト謡テ面ヲシツカリトウケ「燈暗ふしてハ」ト謡。済テ其の俣立脇座ニ行、下ニ居ル。シテ出テ「荒不沙汰の」ト角掛立、シテへ向。一足出テ「なふしあの火の」ト謡問答。「沖の鳥居の」ト角掛目付柱ノ少シ左正面ノ方ヲ見、「馬上におり残す」ト脇正面へ直シ「糸もてつなく駒」ト又角掛「かくともしらて」ト其俣一足出テ下ニ腰ヲ立テ居。「恐れさるこそ」ト合掌スル。「扱御身ハ」ト聞直ニ合掌ヲロシ立。仕手へ向。右ヲ引下ニトクト居。問答「思ひなからも言の葉の」ト脇正面へ直シ、「末を心に」ト謡。「面白し」トシテ二向。「六の色を見するなり」ト打切ニ立。左ヨリフミ出シ廻リ脇座ニカヘリ正面請下ニ居ル。「中にも貫之ハ」トシテ二向。「凡おもつて見れハ」ト直ス。「いつれか和哥の種ならぬ」ト向。「心かくる宮人ハ」ト直ス。「かゝる奇特に逢坂の(此句ニテ)」ト謡イナカラ立。「関の清水に」ト小鼓ノ方へ向。中へ三四足出テ左へ廻リ正面請「月毛の此駒を」ト左ノ方前ヲ見テ左へ一足フミ出シ両手ヲ前へヨセ縄ヲトル心ニテ「引立見れハ」ト両手ヲ右へ上ナカラ左ヲヒネリ右へ引ツケ面ヲ左へ残シ「ふしきやな」ト左ノ足ヲヒネリ向ナカラ両手ヲオロシ「本のことくに歩ミ行」ト脇正面ノ方へ二足

程出テ「越鳥南枝に」ト脇座ノ方へ向。二足程出テ右へ廻リ「胡馬北風に」ト橋掛ノ方へ向。足ヲフミソロへ「哥にやわらく」ト目付柱ノ少シ左正面ノ方ヲ向三足程出テ右ニテ留リ初ノ「神の鳥居」ト向シ所也。「誰か神慮の」ト右ヨリ引跡連ノ前迄サカリ下ニ腰ヲ立テ手ヲツキシギラス。但シ是ハ南正面ノ仕方也。北正面・東正面・西正面、「越鳥南枝」ト「胡馬北風」トノ見所違フ也。「南枝」ハ南ヲ見ル。「北風」ハ北ヲ見ル。尤仕方心有ヘシ。口伝有。謡済キ下ニテシテへ向。「貫之にてましまさハ」ト謡イ「承候」トシテ立ト脇モ立、シテ太コ座ノ方へ向ト脇モ左へ廻リ座ニカヘリ下ニ居ル。「いてく祝とう」ト謡出スト向。ノツトノ中ハ初終向イル。「思ひ出られて」トイロヘニ直ス。「和光同塵」ト向。「天地ひらけ」と直ス。「今貫之か言葉の」ト向「あれハ夫かと」ト立。端ノ名乗座ノ辺迄早ク行。一寸留リトマリシ足ヨリ一足出テシテヲ見送り「貫之も是を」ト正面ウケ直ニ向イヘ六七足出、左へ廻リナカラ面ヲ少シサゲ左ノ足ヲ引ナカラヒネリ右ノ足ヲ右へ引付ヒラキ「名残の神楽」ト笛座ノ上ヲ見テ直ニ左へ向。端ノ名ノリ座ヨリ少シ大鼓ノ方へヨリテ行ナカラ扇ヲヒラキ左へ廻リ正面請「旅たつ雲に」ト返シ二角掛ヲヒネリテ右ノ足ヲ引付ユウケンシテ「旅たつ雲に」ト返シ二角掛「たち(左)かへ(右)る」ト左右ノ拍子ヲフミ謡スミ扇ヲタ、ミ幕へ入ル。但シ「名残の神楽」ノヒラキ東ノ方へ向ナリ。是ハ南正面ノ仕方。正面ニヨリ心有ヘシ。○ヲモ連「旅たち雲に」ト返ニ下ニテ左へ廻リ後口へ向。扇ヲサシ太刀ヲ持下ニテ右へ廻リ脇正面ウケ脇ノ跡ニ付入ルナリ。

(12)《羅生門》連六人ヨリ八人マテ。

一 次第第二段目ニ幕ヲ上、頼光、保昌、立衆ト順ニ出ル。頼光常ノ通正面へ出テ立カヘリ左ノ如ク保昌ト向合

目付柱 二保昌・四ノ連・六ノ連・八ノ連・脇角カケ・大脇座ノ列 一頼光・三ノ連・五ノ連・七ノ連・小

脇ハ如此角カケテ居。地次第二□頼光立廻リ名ノリ。△脇惣連一同二下二居□頼光名ノリ「酒ヲすゝめはやと存候。」ト達拝シテ直ニ保昌へ向合。△「有難や」ト脇惣連一同二謡ナカラ立□頼光ハ「八嶋の波も」ト道行半着也。△脇済其俣「先かう御座候へ」ト左ヨリ一足出テ右ノ手ヲ脇座ヘサス。□頼光・保昌立衆一同二順二座二行頼光ハ床机ニカゝル。其外ハ下二居ル。△脇ハ連ノキテ右フミ出シ右ヘ廻リ端ノ名ノリ座ノ少シ下モ二行。正面請下二居ル。□頼光脇トクト下二居テ脇ヘ向。「いかに面々」ト謡△脇頼光ヘ向手ヲツク。

□頼光「けふも暮ぬ」ト脇正面ヘ直ス。脇「つくく」とトヲキテ打切ニ正面ウケ「忍ふにつたふ」ト下ニテ腰ヲ立右ヘヒラキ面ヲ下ケ前下ヲ見。軒の玉水「目付柱ノ右ノ方上ヘヲ見アケ腰ヲ引立ル。」「ひとりなかむる」ト正面ヘ躰ヲ直シ腰ヲキヒスニヲロシ少シ右ヘ向心ニテ「伴ひかたろふ」ト扇ヲヒラキ右ノワキヲクミ下ニテ頼光ヘ向ナカラ立側ヘ行。「みきをすゝめて」ト頼光ヘ酌ヲスル。左ノ手ヲ右ノ手ノ下タヘ一寸添テ。但シ扇ヒラク所「夕間暮（此所ニテ）やヲ□頼光脇ヘ向扇ヲヒラキ酌ヲ請ル。脇ハズ、ト扇ヲタ、ム。△脇直ニ立。又保昌ノ前ノ方ヘ左ノ足横ニツカイテ下二居。保昌ヘ酌ヲスル。左ノ手ハ添ズ。○保昌扇ヲヒラキ酌ヲ請。脇ハズ、ト扇ヲ、ミ元ノ如ク直ス。△脇立右ヘ廻リ端ノ名ノリ座ノ辺迄カヘリ「兵のましハリ」ト左ヘ廻リ保昌ヲ見。夫ヨリ留ノ連マテ見廻シ、又保昌ヲミ「頼ある中の」ト頼光ヘ向一足出ル。打切ニ其俣跡ヘ引下ニ得与居テ扇ヲタ、ム。「是ぞ雨夜の」ト正面ウケ上ヲ謡。□頼光ハ「思ふ心の」ト直ス。△脇「おもてをめて、人心」ト頼光ヘ向イ「へたてぬ中のたわむれハ」ト真中ヘ出下二居。「ちかくへよりて語らん」

ト正面ヘ直ス。□頼光・保昌ヘ向。「いかに保昌」ト謡。○保昌「御前に候」ト下ニテ頼光ヘ向手ヲツク。△脇「あゝ暫」ト面ハカリニテ保昌ヲ見。「御前にて」ト躰共ニ向。□頼光直ス。○保昌脇ヘ真向ニナル。脇「土も木も」ト正面ヘ直ス。「聞時ハ」ト又面ハカリニテ向。「たとひ鬼神の」と真向ニナル。保昌「何と某」ト左ノ膝ヲ少シヒラク。△脇モ「扱ハ某」ト左ノ膝ヲ少シヒラク。「さもあらけなく」ト正面ヘ直ス。○保昌モ此所ニテ直ス。○「満座のともから」ト保昌ノ次の連ヨリ其俣一同二謡。△脇「いや」ト末ノ連迄見廻シ「保昌に対し」ト保昌ヘ面ヲカヘシ「ひとつハ君の」ト頼光ヘ向。「しるしをたへと申けり。」ト手ヲツク。□頼光脇ヘ向「実々綱か」ト謡。「是ヲ立置」ト右ノ手ニテ懷中ノ金札ヲ出シ、「札ヲ取出」ト前ヘ出シ「たひけれハ」ト下ヘ捨ル。△脇札ヲ落スト直ニヲキ札ヲ見、「綱ハ印ヲ給りて」ト謡ナカラ立行。札ヲ両手ニテトリイタ、キ「御前を立て」ト（此句ニテ）札ヲ左ニ持、右ノ手ヲ放シ下ニテ右ヘヒラキ立。シテ柱ノ左ノ方ヘ行。「立帰り」ト左ヘ廻リ留ノ連ハ見廻シ保昌迄向ナカラ一足出「あたちか原にあらねとも」ト真中始メ居たる所ヨリ少シ先ヘ出、正面ウケ下二右ノ膝ヲツキ左ヲ立腰ヲ引立居。左ノ手ヲ左ノ膝ノ上ニツケ「こまれる鬼を」ト右ノ手ヲ真直ニ上ケ肩ヲ後口ヘネサシ「したかへすハ」ト（二付テ）右ノ膝ヲ扇ニテ打、其扇ニテ直ニ保昌ヘサシ面ハカリニテ向。直ニ右ノ手ヲ引、「二度又人に」ト左ノ足ヲヒラキ末ノ連迄見廻シ「事あらし」ト又保昌ヘ面ヲカヘシ「是迄なりや」ト頼光ヘ向。右ノ手ハカリツキ「梓弓」トヲキ下ニテ左ヘヒラキ留ノ連ノ方ヘ向立ナカラ右ヨリフミ出シ右ヘ廻リ橋掛ヘ向。右ヲ跡ヘヒラキ其俣シテ柱ノキハ迄行。早鼓打出シ二一寸留リ又右ヘヒラキ其俣幕ヘ入ル。一又「梓弓」トヲキ「引ハカヘサシ」ト其俣立。保昌ヲ面ハカリニテ見。

「やたけ心ぞ」ト右へ廻り正面ウケ右へヒラキ「恐ろしき」ト右へ向。
シテ柱ノキハ迄行。幕へ真向ニナリ早鼓打出ニ一寸留り右へヒラキ
其俣幕へ△モ有り。尤両様共ニ走リテ入ルナリ。□頼光早鼓ニナリ
立。一同ニ立跡ニ付入。尤何レモハシラズニ入。中入。一 中入後
台大小ノ前へ出ル。上ニ左へヨセテ小屋台ノセル。脇連ナシ。一声
越テ出ル。幕ハナレ有。一ノ松ノ所ニテ右ヲサシ右へヒラキ。《土蜘蛛》
之通。「扱も渡辺の綱」ト謡。重代の太刀をはき(此句ニテ)きト
左ノ方前ヲ見ル。「たけなる馬」ト左ヲ引付少シヒラキ右ノ方前ヲ
見「舍人をもつれす」ト右へ向。幕ノ方へ六・七足行。左へ廻リシ
テ柱ノ方へウケ「南かしらに」ト一ノ松少シ先迄ツメテ行留リキビ
スヲ上「あゆませたり」ト打上ノ刃ニ付テキビスヲオロシ拍子有。
「春雨の」ト左ヲヒネリ右へヒラキ正面ウケル。「鐘モ聞ふる」ト舞
台へ向。台ノ右ノ角迄行。「とうしの前を打過」ト行ウチヨリ目付
柱ノ方へ少シウケ「うつていて」ト目付柱ヨリ少シ中へヨリテ左へ
向。作物ノ上ヲ見、「羅生門を見渡せハ」ト左ノ手ニテ黒頭ノ前ヲ
トリ右ノ手ヲ少シ下ケ「俄にふきくる」ト右へヒラキ橋掛ノ方へ向。
「風の音に」ト面ヲ前ヘトリ少シ下ケ「駒もすゝます」ト正面へ向。
下タヲ見、左ヨリフミ出シ右今三足ヤリコシ両手ヲ前ヘヨセ手綱ヲ
トル心ニテ其俣跡へ引、台ノ横迄下リ右へヒラキ「た(右)つた(左)
りけれ」ト右左ノ拍子ニツフミ面ヲ向ヘアケル。又「たつた(左)
りけれ」ト左ハカリフモ有。其時「馬を」ト橋懸へ向テ行ナカラ
鞭ヲ三ツ打。橋懸式間余行板付へ向テ鞭ヲ捨左へ廻リ「羅生門の石
壇にあかり」ト台ノ右ノ方横ヨリ左ノ足ヨリ上リ「しるしの札を」
ト金札ヲ出シ、正面へ見セ「壇上に立をき」ト作物ニ向、札ヲ作物
ノ内へ入レル。但シ引廻シアレハ引廻シノ上ヨリ入テ直ニ目付柱ノ
方へ向一足出ル。シテ「後より兜の」ト黒頭ノ上ニ手ヲカケル。脇

左ノ手ニテ黒頭ノ紐ヲ持。左ノ足ヲ跡へ引腰ヲシヅメ「太刀ぬきも
つて」ト太刀ヲヌキ左ノ肩ヨリ後口へ二ツハライ右ノ肩ヨリ後口へ
又一ツハライナカラ黒頭ノ紐ヲトキ目付柱ノ方へ飛リ直ニ右へヒ
ラキ太刀ヲサケテ作物ヲ見。又左へヒラキ太刀ヲ前ヘカサシ脇座へ
行右へ廻リ左へヒラキ下ニ右ノ膝ヲツキ左ノ足ヲフミ出シ太刀ヲ右
へヒラキ左ノ手ヲ添テ腰ヲ引立シテへ向入ル。シテ「取たる兜を」
ト脇ノ前ヘ頭ヲナケル。脇黒頭ヲ腰ヲシヅメ一寸見テ又シテへ向。
舞働ノ中始終此俣イル。打上テ「綱ハさわかす」ト謡ナカラ立足ヲ
ソロヘ左ヨリフミ出シ右ヲヤリヨン太刀ヲ向フヘ見セ又右へヒラキ
太刀ヲカサシ「其天罰」ト其俣ニ足程ス、ミ出「かゝりけれハ」ト
左ヲフミ込留リ待居ル。シテ「ゑいやとうつを」ト脇ヲ打ナカラ脇
座へ行ヲ脇太刀ヲサケ左へ一寸飛。シテヲ通シ直ニ左ヘフリカヘリ
シテノ後口ヨリ切、又右へ飛カヘリ台ノ右ノ角ノ所ニテ太刀ヲ下ケ
シテヲ見テ待。「きられてくみつくを」トシテクル所ヲ左ヘハライ
ナカラ左ノ膝ヲツキグワツシ其俣又右ヘハライ直ニ立脇座ノ前迄
行。右へ廻リナカラ正面ヲ見マハシ橋掛へ向行。わき「つゐしのほ
り」ト台ノ上右ノ角ヲ飛コシ直ニ橋掛ヘ式間余行留リ右ヨリ引左へ
ヒラキ「黒雲おほひ」ト上ヲミ「時節を待て」ト左へ向。舞台ノ方
ヲ見。右ヲヒネリ左へヒラキ太刀ヲ前ヘカサシ舞台へ入り正面ウケ
目付柱ノキハ迄行留リトマリシ足ヨリ引太刀ヲサケ右へヒラキ「か
すかに聞ゆる」ト面ヲ前ヘトリ少下ケ「鬼神よりも」ト左ノ足ヲ引
付太刀右ヘサシ廻シ端ノ名ノリ座ノ所ニテ右へ廻リ正面ウケ右へヒ
ラキナカラカタニカツキ角ヘトリ「あけにけ(左)れ(右)」ト左
右ノ拍子ニツフミ常之通謡済太刀ヲオロシ幕へ入ル。

(13) 《正尊》(連ナシ)

一 始シテ連脇座ニ得与付テ脇出ル。端ノ名ノリ常之通達拝済《小

鍛冶」大臣之通ニ橋掛へ行。長短ニヨラス。橋掛中へ入テ幕へ真向ニナリ「いかに此内へ」ト謡。「正尊ハ此屋の内に渡り候か」ト謡。橋掛ノ正面へ《船弁慶》ノ通ニ直ス。シテ出テ「武蔵殿とハ」トシテへ向。「是ハ君よりの御使にて候」トシテ跡へ引下ニ居ルヲ見テ「御上りの由」ト謡。「いや／＼（左一足引。尤一寸アシライノ足ナリ。）片時も」ト扇ヲサシ数珠ヲ懷中ス。但シ扇・珠数ハザニカケテスル事。「いなにハあらずいな船の」ト返シニシテノ側へ行下ニ居。両手ニテシテヲ引立一所ニ立手ヲ放シ脇ハカリ跡へ二三足引テ「いたつらに」ト打切ニ仕手ト入替り左ノ足ヲ引、表ヲ通りテシテノ跡ニ付舞台へ行。シテ太コ座へ行下ニ居ルヲ一寸見テ直。舞台ノ真中へ行、義経ニ向下ニ居。手ヲツキ「いかに申上候。」ト謡。「畏て候」ト立直ニ右へ廻リ太コ座へ向。「いかに正尊」ト謡。直ニ左へ廻リ三番目の連の前ニ行。角カケ下ニ居ル。「御説のことく」ト義経ニ向。手ヲツキ「和僧におひて」トヲキテ左ノ膝ヲヒラキ面ハカリニテシテへ向。シテ「是ハ御説にて候へ共」ト義経ニ向時、元ノ如ク直シ居ル。「御前にこそハ参りけれ」トシテへ向。起證文中向イル。「本より空言とハ」ト立直ニ右へ向。惣連ノ留ニ行。正面請下ニ居。扇ヲ抜時、是迄ハ扇持ズ。珠数ハ爰ニテモ出サズ。此間中入迄アシライナシ。「各退出申けり」ト連残ラズクツロク。ワキハクツロガズニ居テ謡済ト立テ其俣四五足前へ出「いかに誰か有」ト云。狂言シテ柱ノ所へ出ル。説賦済、直ニ太コ座へ深ククツロキ、下ニ居、装束付ル。珠数・扇捨ル。狂言脇へカ、ル。ワキ答ナシ。装束出来次第ニ跡へ下ニテサカリ居ル。シテ連不殘脇正面へ向立。△脇立「義経」ニ而真中へ出、下ニ居。手ヲツキテ「いかに申上候」ト謡。「静ハさせなか」トヲキ「義経是を召れつ、」ト惣連ノ跡ニ行。クツロキ長刀ヲ持「中門の楼に」ト立。右へ廻リ正面ウケ連ノ前へ出ル時

ワキモ二足出ル。シテ出テ「味方の勢ハ是を見て」ト少シ左へヒラク心ニテシテへ向。「弁慶を先として」ト一足出ル。カケリニ正面へ直ス。カケリノ留ニ長刀ヲカイコミ左ヘトリテ廻ル心ニテ真中へ出。シテへ向、長刀ヲツキ「其時弁慶」ト謡。但シカケリノナキ時ハ「た、かふたり」ト云時如此ニ出ル。「いさ一太刀」ト左へ少シヒラク。「実ゆ、數も」トアネハへ向。尤真向ニ向フ。「志を報ぜん」と長刀ト引直ス。切組「二ツになつてぞ見えたりける」。此間口伝。但シ少ハシテ連ト申合ニヨル。「正尊是を見るよりも」トシテへ向。直ニ右へ向。元ノ所へ行正面ウケル。「乱れ入を」トシテヲ見、「透間あらさず戦ひ給へハ」ト義経ノ方ヲ見「引違けるを」ト又長刀ヲカイコミ左ヘウケ跡ヲ付テ行。義経ノ前ノ所ニテシテへ向。右ヘヒラク「戦ひけるか」ト長刀ヲトリ直シ一打下ニテ合セ長刀ヲ右へ捨。シテト組テ一遍廻リシテヲ下ニ立テナカラ両手ニテ押ヘツケ構ヘ二足程引、角カケ居。留ニ静ノ跡ニ付テ入ル。尤長刀ハ持ズニ入。キリノシテトノ切組モ申合ニヨルヘシ。心アリ。

注

拙稿「シテ方宝生流辰巳家所蔵『脇直伝仕方附』について」、「東海能楽研究会年報」第二十二号、東海能楽研究会、平成三十年三月発行、八〇九頁

補記

貴重な伝書の閲覧・翻刻を許可下さった宝生流シテ方辰巳満次郎先生に心より感謝いたします。本稿は芸能史研究会二〇一八年四月例会にて発表した内容を基としています。また平成三十一年度科学研究費助成基

辰巳家所蔵脇型附について（一）

盤研究（C）「東海地域近世・近代能楽資料の収集・整理とアーカイブ化」
（研究代表者：飯塚恵理人、課題番号：17K02432）による成果の一部と
なります。

* 文化情報学部 文化情報学科